

風

塵

風塵

早乙女 貢

風 塵

五八〇円

昭和四十五年一月二十日 第一刷
昭和四十五年十月三十日 第二刷

著 者 早 乙 女 貢

発行者 星 野 慶 栄

発行所 毎 日 新 聞 社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町

印刷／図書印刷
製本／大口製本

目次

野火

七

落城賦

三

白い影

三

忍びノ者

三

匂う肌

五

首走る

四

浮かれ巫女

五

まぼろし

六

一天地六

七

鉄炮商人

八

血と詩

九

恋かげろう

一〇

伊賀の谷

一一

くノ一化粧

一五

湖笛

一七

白い蛇

一八

忍びノ舞

一九

密使

二〇

狂い卅

二一

欲望の街

二二

謀叛

二三

その前夜

二九

赤い渦

三二

本能寺炎上

三三

雲の流れに

三四

荒野

三五

夕陽の三人

三六

装幀 横塚 繁

風

塵

野 火

うろこ雲が半天にひろがり、飛ぶような早さで流れていた。近江と美濃をかざる伊吹の山なみは遠く紫紺に霞み、雲はそのさきまからむくむく湧き出てくる。

灰色の雲の群れは、重くけだるい形相で濃尾平原の天をおおい、おびただしい魚鱗を散らせると驚くばかりの速度で頭上に流れてくるのだ。すでに黄ばみかけた陽をうけた面は眩しく輝やき、反面は暗いかげを抱いていた。

雲の動きとは逆に、木曾川はこのあたり緩慢な歩みで平原を流れてゆく。

その木曾川が大きく湾曲して南流するあたり、中洲の葦の間に小舟が一艘。

仰向けに寝ころんで雲を見上げている若者がある。長い刀を胸に抱くようにして。

（――あの雲は）

西から東へ――

（何処へ流れて行くのか、甲斐か信濃か……）

ひたひたと舟底に戯れる小波のみなもとは、飛驒の山塊を越えて木曾山中にある。

信濃は生国だ。が、小諸の近在というだけしかわからぬ。

両親はむろん、おのれの名も知らぬ。兄弟もいたかどうか。

家族は暴風のような戦乱がさらっていった。家も田畑も兵火は灰燼にした。劫火はかれ以外の存在の一切を無にして去った。

眼のなかで流れる雲が色づいてくる。陽が赤みを加え、そのいろを映した雲がかれの記憶を呼びさますのだ。村を焼く業火に染められた雲のすがた――。

遠い記憶の霧の彼方に、その赤い雲は潤んでいた。あるだけの涙は三日三晩、噴きこぼれて底をついたのか、涙の涸れた幼児は野良犬のように生きた。もの心ついでに放浪の歲月は十五、六年――人はかれを「山猫」と呼んだ。

水面が波打ち、葦が騒いだ。

空の風に呼応するように川面を吹く風も強くなった。異様な臭気が流れてきた。肉の焦げる匂いだ。

「山猫よッ」

中洲の砂の上に枯葦が燃えている。炎を囲んで二人の少年がいた。蓬髪に破れ布子。二人とも曳きずるような打ち刀が不釣合だ。

呼んだのは山猫より一つ二つ歳下と見える方で、背が低い。丸顔にうすあばたのせいかわさと呼ぶ

れていた。

「焼けちよるでエ、早う来ねえと無くなるがなも」

折れ槍を高々と振っている。

その穂先に串刺しにされた肉塊が三つ。ぶすぶす青い煙の臭いが強い。

鼠だ。人間たちの飢餓をよそに丸々と肥えているのは何を食べてのことか。焼け倉の落ち稗か、戦場の死体か。

「山猫ヨウ、起きて来やあせ、おれとくる目で食っちまうでエ」

モガサは焼け鼠を穂先からこそぎ抜くと、ぼんとくる目に投げた。くる目は、にっと笑う。十三、四か。品のいい目鼻だちだ。笑うと女のような色白の頬にくっきりと、えくぼがはれて、八重歯がのぞく。

鼠肉には馴れているのか両足をつかんでびりつとひき裂いたとき、

「おい、見ろ」山猫が叫んだ。

「女だ……」

左岸の笠松堤。疎林をぬけて来た一行がある。打掛姿や小袖の女たち。きらびやかな花文様が、かっと夕陽に映えた。

山猫の目は光っていた。

精悍な面をひきしめ、食い入るように左岸を見つめている。

春の陽は赤みを帯び遠く西のはての山なみに落ちかけてい

たが、濃尾の野づらを照らす光りに不足はない。木曾の流れはぎらぎらと輝やき、宵風が小波をかきたてていた。

その光りのなかにあらわれた女人たちである。忽然とあらわれた感じだった。

花がこぼれたような——華やかな花模様の小袖の群れが笠松堤をおりてくる。

縫い取りか、染めわけか、判然としないが、柔らかそうな生地にときどき、きらっと光るのは金銀の箔が散らしてあるのであらう。

(きれいだ……) ごくりと山猫は生唾をのんだ。

一目で高貴の身分と知れる。京の都ではいざ知らず、この辺でこれほど華やかな目もあやなばかり揃った美女の群れを見ようとは。

(夢か?……いや夢ではない)

あくまでも明るい川べりだ。

輿は六挺。二つは老女のものか。主人とおぼしい楚々たる打掛姿の女性と、姫らしい三人。侍女が同じくらいの人数で護衛の侍たちや長刀持ち、荷持ちの小者など全部で二十人ほどの一行である。

「ふえエ、唐櫃ひっくり返したようだなも」モガサがしゃがれ声でいった。「どこ」の姫御前きやあも」

「その眼はふし穴か」山猫は凝っと女たちを見つめたまま、呟やくようにいう。

「清洲のお市さまと姫たち……たしかにそうだ」

——お市ノ方。

その名ならモガサもくる目も聞いていた。

いま、天正十年三月はじめ。この尾張の小城から今川義元を亡して以来、ぐんぐんのし上った織田信長はいまや正二位右大臣の肩書もかなぐり捨てて、六十余州制覇の野望の駒を進めていた。

近畿五カ国はもとより京では朝廷を掌握し、北陸から中国の東半を攻略。さらに武田信玄亡きあとの甲斐。信濃に食婪な手を伸ばした。精強を誇る大軍が山津波のように信濃にだれこんだのは、つい半月ばかり前のことである。

お市ノ方はこの信長の実妹なのだ。浅井長政の遺児である三姫を連れて尾張清洲へ帰ってきけていたが、このたびの出陣祝いに岐阜へ行った帰途であった。

天下無双とうたわれた母の美貌をうけて、三人の姫たちの美しさは遠目ながら天女のように見えた。食い入るように凝視した山猫の眼。モガサもくる目も、かつてこれほどの真剣な表情を見たことがない。

女を抱いても、美味な食物にありついても歓喜するということがなかった山猫が、憑かれたような眼になっているのだ。渡し舟の用意ができたらしい。姫たちのはしゃぐ声が聞えてきた。山猫は低く呻いた。帯をとき垢じみた小袖を脱ぎ捨てた。

「何をするのけ、兄き」

「そばにいつて見る」

「え！」

「抱ければ、抱く」

山猫の眼は燃えていた。黒い炎だ。女性に対してこれほど烈しい感情を抱いたのも初めてだった。

「近くで見ねば損だ」

乱世には明日を思わぬ。今日が、現在がすべてだ。飲めるときに飲み、食べるときに食べる。明日の生命さえ信じられない時代なのだ。衝動のままに生きるしかない。

「抱ければ抱くぞ」

そういったとき、山猫の姿は水中に消えていた。三尺に及ぶ打ち刀をななめに背負って下帯一つの裸身である。

「おれも行くぎゃあも」

モガサも布子を脱ぎ捨てた。

鼠の焼肉を持ったまま、くる目はまごまごしている。年少のくる目には美女の匂いより焼肉の匂いのほうが魅力的だったろう。

だが、モガサが同じように裸身となって水へ沈むと、あわてて、

「おらも行かあ、置いてきぼりはいやだよ」

焼肉をぐびりと呑みこんで、あとを追った。

渡し舟は供侍や輿を残して、今しも漕ぎだしたところだっ

た。お市ノ方と三姫のはかは老女と侍が槍、長刀で付きしたがう。

長姉の茶々は十七歳。からだつきも容貌も母に似てほそもての鼻がつんと高い。幼少から感情をあらわすことの少ない子だった。その近より難いばかりの高貴性は、江州の名流浅井長政の子という矜持からくるものでもあったが、伯父信長の残酷な浅井攻めで、小谷の城が焼け落ちるさまを目撃したときから、その美貌に冷たさが加わったようであった。

お初と江子（小督）は、あの小谷落城の際は五歳と三歳。頑

はない幼児はただ恐怖と不安でおびえていただけだ。あれから十年。茶々の心に深く焼きついた政略の不信感は、妹たちの心を傷つけるまでには至らなかつたようである。

出戻りの連れ子でも、天下人の庇護のもとに不自由のない暮しに甘えて外を見ようとしな。お市ノ方がまたそのように育てた。戦国の世の女の運命が、政略の具から逃れられないものなら、娘時代をせめて楽しく過ごさせたい。

母の愛に甘えて二人には姉のような賢がなかった。こうして城の外へ出ることが滅多にないだけに、舟に乗るとお初も江子も嬉しくてはしゃぎまわってしまう。

「——あら、お魚が」

「どこ？ お姉さま」

「そら、あそこよ、あ、逃げる」

お初は舟べりから手を差しのべて水に触れようとする。

ざぶっと飛沫がかかって、「あれ？、つめたい」
「お危のうございます。お気をつけなされますよう」
老女が蒼くなつて抱きとめる。

そんな妹たちを茶々は、しょうのない子、と睨んで、
「お初も江子も静かになさい。少しはしたくないですよ」

「でも、いい気持ちなんですもの」

「落ちてよければ、そうなさい」

白磁の持つ美しさの底に、冷たい硬さが甘えを許さない。
妹たちは顔を見合せて首をすくめた。

そのとき、お市ノ方がきつとなつて水面を見た。

舟は川中へさしかかつていた。

「落着くのですよ」お市ノ方はつとめて静かに言い江子を抱き寄せた。「騒いではなりません」

遊弋の魚影も見える清澄な川のなかに、異様な影が動いた。雲の形はすっかり変り、どす黒く凝固して夕陽を遮っている。赤々と空を灼いて沈んでゆく大きな火ノ玉は、時折雲を裂いてかっと強烈な光りの箭を放った。ギラギラと血を流したように鮮烈な赤い川にうごめく異様な影。

はっと、茶々も身を堅くした。

死体か——、と思ったとき、ばかりと水面が割れ、顔が出た。一つ、二つ、三つ。ぶるるゝと飛沫をはねて河童のような頭が並んだ。にたりと笑ったのは山猫である。奇妙なほど歯

が白い。

江子が悲鳴をあげた。お初もたまぎるような声を奔らせて、お市ノ方にしがみつく。

「御用心なされましよう」

つと長刀ながたちをとり直した老女はさすがである。

熊髭の屈強な供侍も、はっと我にかえった。

「うぬら、近寄るまいぞ」

手槍の鞘を払って膝を起こす。狭い小舟である。人数は限度だ。動き次第で転覆の恐れがある。

船上の騒ぎの意味が、呑みこめないように、山猫は悠々と立ち泳ぎしながら、

「恐れることはないさ」と言った。「姫の顔を見に來ただけだ」

その鼻先にひゅつと手槍がのびた。

「うせろ、不埒な。こちらさまをいずれさまと心得てか。土下座せずば汝らの眼など潰れてしまふぞ」

護衛の任にあるだけ、腕はたしかだった。槍の穂先は確実に三人の顔を狙って走る。

「見ちゃいけないのか」くる目がいった。

力も手職もない浮浪児は城下や村の辻で、分限者の門口で、芸をひさいで一碗の飯にありつく。

馴れで可愛いのが取柄だった。誰に教わったともなく、眼玉を裏返して瑠璃玉のような白眼を出す。門口に立つ者が

多くて一々喜捨に応じられない時勢では、こんなことでも芸のうちだった。

いまでも咄嗟とつさにそれが出た。

「これでいいだろう」

くるりと黒眼が消えた。意表を衝かれて侍はぎょっとなった。一瞬の虚だ。山猫の手が千段巻をつかむ。引く。熊髭は何やら吼えた。すさまじい咆哮は三人の頭上を越え、丈余の水飛沫しみずがこれをかき消した。

「甚五左が……」誰かが叫んだ。その声が途切れたのは、反動のように山猫が船上に飛び上っていたからである。

「理不尽な！」

老女の一颯いさつに空を切らせて、山猫は軽く長刀を抱えこんでいる。

そして茶々に視線をもどしたとき、その猛々たけだけしい眼には情念の光りが点じられていた。

「お茶々さまか」

「……………」

「お茶々さまだな」

懐剣に手をかけていながら、茶々は動けない。

「——おれは」と喘ぐように山猫は言った。「そなたを抱きたい」

火のような語氣に、茶々はめまいすらおぼえた。いまや天下人として飽くなき侵略の駒を進める織田信長の姪である茶々

姫に、これほど大胆で率直な言葉を吐いた者がいたろうか。

茶々自身が真つ蒼になって、ものもいえなかった。

羞恥ではない。怒りと屈辱でわなわなと顫えていた。懐剣に手をかけたまま、抜き放つことも出来ないでいた。恐れを知らぬ野性の逞しさに圧倒されたのだ。

平安の世のように男が女に通う風習は廃れていたが、歌に託しての恋情の秘めやかさに女は憧れる。武家が実権を握る世にあっても女性の夢はやんごとなき殿上人の生活にある。故実典礼はすべて公卿の作法にならって定められた。

女は常には選ばれる側にある。選ばれる喜びと不安が処女のすべてだった。貴族としての贅美逸楽のうちに成長した茶々の夢の中では天上眉も青くすがすがしい白面の貴公子が、凛凛しい青年武将が愛を囁いた。

いずれは政略的な輿入れを強いられるとわかっていても、いや、それなればこそ、淨らかな身の、汚れない乳房を抱いて夢を見ているのだ。

なのに、牙をむいた山猫はいう。

「そなたが好きだ、お茶々さま」

長い打ち刀をななめに背負い、下帯一本の裸身。頭からずぶ濡れた若者の、隆々たる筋骨に夕陽が映えてギラギラ光っている。

「ぶ、無礼な……」

「無礼は承知だ。こうでもせねばそなたの顔が近くで見えぬ。

清洲のお城で逢わせてくれるか」

「……………」

「なるまい、だがおれはほしい」

ぼたぼた垂れる滴を拭いてもせぬ。濃い眉の下で野獣のあららしい眼は茶々の魂を吸い取るような力をひそめていた。

（なんとという不遜な）茶々の心は抗った。（こんな男、賤しい男、下郎が）

反発しながら、眼をそらせないのが、いまいましかった。

「お茶々さま」と山猫はいった。

「おれは必ずひとかどの侍になる。一国一城の主になったとき、そなたを抱く」

「……………」

「その美しい眼、おれを蔑む眼も、いつの日かおれの腕の中で泣くようになる。涙でぐしゃぐしゃになる。そうして見せるぞ」

お初も、江子もこの無法者の語気に押されて息もできないでいたが、さすがにお市ノ方は氣をとり直すのが早かった。

「お退りなさい」と、静かにいつて出た。「申したきことあれば、一城の主となってから参るがよい」

にやりと片頬を笑わせて、山猫はお市ノ方を見た。

「おふくろさまは、何処でもそういうさ……」

眼がそれた一瞬、茶々は呪縛を解かれたような氣がした。ほとんど反射的な動作だった。

「痴れ者！」

するどく切り裂くような声が奔った。袖がひるがえった。

白い光りが弧を描き、のけぞった山猫の顔にぱっと血がしぶくのが見えた。

女と思つての油断もある。しみ一つない肌の清らかさ、黒曜石の瞳の奥深さが、野性の本能を鈍らせていたのは否めない。

懐剣の冷たい光り。一瞬の袖の翻転にも、刃を避けられなかったのは、たきこめられた薫香の匂いのせいだ。いや、もっと端的に言えば薫香にまざった茶々の甘肌の匂いが山猫の心をとらえていたともいえる。

「あっ」眼前に虹が走った。

頭を削がれたような痛みとともに赤い霧が飛沫く。眼がくらんだとき二ノ刃が、これは胸へ一突きに來た。避けた。急所はそれだが避けきれず左肩へぶつり突き立った。

「いけねい、山猫が」

こんな結果になるとは思つてもみなかつただけに、モガサとくる目は仰天した。泳げない甚五左の狼狽ぶりを笑つてはいられぬ。二人は抜刀した。

山猫は額から流れる血潮に眼をふさがれながら、

「くるな、逃げる！」

自ら舷を蹴つて、うしろ飛びに川へ転落していた。左肩には懐剣を突き立てたまま。

モガサもくる目も決断は早い。愚図つくひまはない。一瞬の誤算が生死を左右する時代の子であつた。二人の頭はずつと沈んだ。

このときはもう、岸の供侍たちが泳ぎ寄つていたのである。山猫が船上に躍り上ったとき、数人が着衣のまま飛びこんでいる。

常なら河童そのけに滝壺でも激流でも泳ぎきる山猫だが、額を斬られた上に、左肩に刃を突き立てたままでは尾ひれをもがれた魚だ。向う岸に泳ぎつくのがやつとで河原へあがつたところへ侍たちが追いつがつた。振り返りざまに抜き討つた。だが、その一刀もむなしく先頭の刃を叩き落す効果しかなかった。

河原石に足をとられ、よろめいたところへ、飛びつかれた。片膝ついて投げ飛ばす。その背に数人が折重なつた。

非情なのは両手を縛りあげるまで肩の刃を抜き取つてくれなかつたことである。河原に転がされた山猫は宵風のなかで眠気を感じた。半身がしびれている。

不思議と痛みはない。四肢にも知覚はなかつた。こんな経験は初めてではない。むかし村人に追われて雪の山で凍死しかけたことがある。そのときの奇妙にこころよい感覚に似ていた。

（——死ぬのか、ここで）

それも悪くない、とぼんやり考えていた。臉の裡で赤い雲

が広がっている。その雲の中に顔がある。茶々の冷たいまでに整った顔だった。

一瞬、その顔が消えた。火が吹いた。激痛が去り、山猫は正気にかえった。

「……………」

甚五左の髭面が眼前にあった。

胸を足で踏んずけて乱暴に引き抜いたのだ。肉が刃を巻きこんでいたからたまらぬ。だが、その痛みがかれを正気づかせたのは事実だ。山猫は歯を食いしばって耐えている。

太陽は沈んでいたが、まだ西の空には茜が残り、群れ鳥の声が陰惨な尾を曳いて渡った。

甚五左は水を飲まれた怨みがある。懐剣を引き抜くとき故意に傷口をひろげたのは明らかだった。

懐剣の血を拭うと、敬々しく差し出した。茶々は冷たく一瞥しただけである。

「お捨て」

「は？」

「けがれた刀は差料にできませぬ」

山猫の口から、はじめてうめきもれた。

「おれの血が……」

語尾は噛み殺された。辱められることには馴れている。侮辱を感じるほど、神経は細かくなかったはずである。

それが茶々の言葉でなかったら山猫の受けた衝撃はもっと少なかったろう。

「おれの血を洗うには、木曾川の水では足りないか」

面憎いまでのふてぶてしさが、茶々の怒りをさらにかきたてた。

「この無礼者の鼻を削いでおやり」

「まあ、お茶々なにをお言いだえ」

お市ノ方が驚くのを、

「よろしいの、こういう無礼者は懲らしめねばなりません」

「いいとも」言下にうそぶいたのは当の山猫だ。「だが、やるなら姫の手でやってくれ。惚れた女に殺されるなら本望さ。」

さあ、お茶々、やれ！」

さすがに茶々は、言葉を失っていた。

乱世の女だ。高貴の身分でも血を見ることはさして怖れぬ。首級に化粧したり、女童の髪を結び直したりさえした。だが、無抵抗の者の鼻を削ぎ落せるか。

「いずれ……」と、言った。声はかすれている。

「思い知らせてくれようほかに」

「ほう？」山猫は、わらった。嘲けりをこめた。「怖れたな、お茶々」

「なにを申す」

「ははは、よいわさ、それが女子だ。可愛いや、おれの想いは変らぬ」